

青陵

第 167 号

二〇二三年二月一日発行
 発行者 奈良県立
 橿原考古学研究所
 奈良県橿原市畝傍町一番地
 編集者 木村理恵

バハレーン・マカバ古墳群の調査

二〇一七―二〇一九

西藤 清秀

一. はじめに

一九九〇年から二〇一一年まで、BC一世紀からAD三世紀に栄えた隊商都市シリア・パルミラの墳墓の調査を実施してきた。しかし、二〇〇九年に始まった「アラブの春」の影響により二〇一一年にはシリア国内でも紛争が勃発し、パルミラの調査の中断を余儀なくされた。そのような中、パルミラ碑文にバハレーン(ティロス)でのパルミラ人の活躍が記されているのを知り、バハレーンにおけるパルミラ人の存在を研究すべく二〇一七年より調査を進めることになった。

バハレーンは、ペルシア湾のアラビア半島東岸沖に浮かぶほぼ東京二三区の広さの本島と三二の島からなる。人の居住は、新石器時代(BC二五〇〇年以前)に始まり、それ以

降、豊富な水、地理的優位性を生かした海上交易を基盤として綿々と続いている。特にBC二五〇〇年頃、BC三〇〇年には、海上交易を巧みに利用し、経済基盤を築き上げたディルムン文化が栄え、約一七万基

もの古墳が築造された(Lombard & Alsendi 2000)。その最盛期には、大規模な墳丘を有する王墓と呼ばれる古墳が築造されている。次のティロス文化(BC三〇〇年〜AD六〇〇年)では、墳丘や埋葬施設の形態は前文化とは全く異なるが、古墳は引き続き築造された。しかし、七世紀中頃のイスラーム文化がバハレーンに浸透する頃には、古墳は築造されなくなった。

二. 研究の目的と方法

ティロスは、アレキサンダー大王

目次

バハレーン・マカバ古墳群の調査	1
二〇一七―二〇一九	
中央アジアの農耕牧畜民遺跡	
モル・ブラク1・2遺跡の探索報告	6

西藤 清秀 1

辰巳 祐樹 6

東征中のBC三二五年〜BC三二四年にギリシャ世界に名を知られることになる。パルミラ碑文によると、パルミラ人は、ティグリス・ユーフラテス河口域のバルティア支配下のカラケネ国と密接な関係を持ち、カラケネ国のカラクスに拠点を置き、クシヤン朝支配下のインダス川河口のバルバリコンとの交易を行っていたことが記され(図1)、その旅程にティロスが存在したと考えられている(Seland 2014)。また、AD一三一年のパルミラの顕彰碑文にパルミラ人のヤルハイ(Yarhai)がカラケネを背景にティロスの大守(Shahar)として活躍していたことが刻まれている(Gregoratti 2019)。このようにパルミラ碑文から、パルミラ人がティロス社会に深く関わっていることが分かる。

以上のことからティロスの古墳の発掘調査を通して被葬者集団の属性(葬制・埋葬方法、副葬品の種類、副葬品配置)と被葬者個々の属性(身

体的特性・性別、年齢、身長、病理、DNA等、食性・低年齢時の食環境、社会的特性・棺規模と副葬品の種類に集団内地位)を抽出し、ティロス社会のパルミラ人を含めた人々の多様性の有無を探ることにした。特に人骨の理化学的分析では、出土人骨の歯のフッ素含有量分析、炭素・窒素・酸素・ストロンチウム同位体分

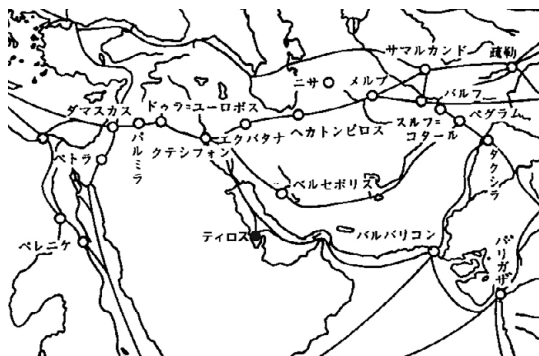


図1 交易都市ティロスの位置

析が人の移動を探る絶好の手段と考
えている。

三、バハレーン・ティロス文化の古墳の特徴

ティロスの古墳群は、本島北岸沿いに一三カ所余り形成されている。外観上は、数基から数一〇基で古墳群を形成する。Salman と Andersen (二〇〇九) によると、ディルムンと異なりティロスの古墳は墳丘が低く直径数メートルの円墳で、中には貼石が施された墳丘が他の墳丘と重なりながら、多い場合には二〇〇基が築造される。それらの集合体として、大規模で不定形な墳丘が形成される。大規模な墳丘は、直径約六〇〜七〇m、高さ約五mにもなる。埋葬施設は一小墳丘に一つで、漆喰棺が一般的である。漆喰棺は、両拳大の石材に漆喰を挟みながら四壁を積み上げ、棺内面に漆喰を塗り仕上げる。床面にも漆喰が塗布される。棺を積み上げていく際には、棺壁の裏側に土砂が積み、同時に墳丘も造られていく。最後に数石からなる蓋石が棺上に横架され、その隙間は漆喰と礫で塞がれ、盛土・貼石が施される。大規模墳丘内での小墳丘の配置は棺の位置で分かるが、ティロス後半期に

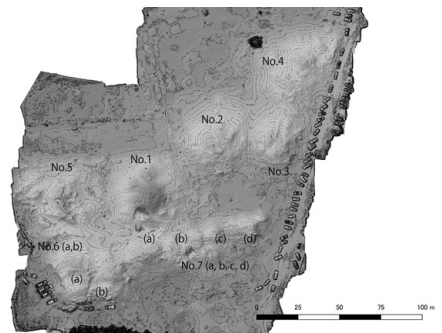


図2 マカバ古墳群西区

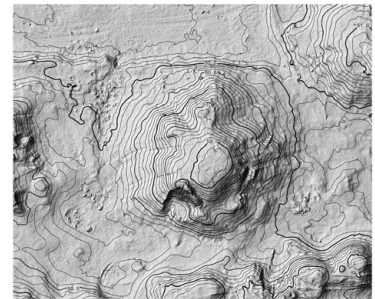


図3 マカバ第1号墳

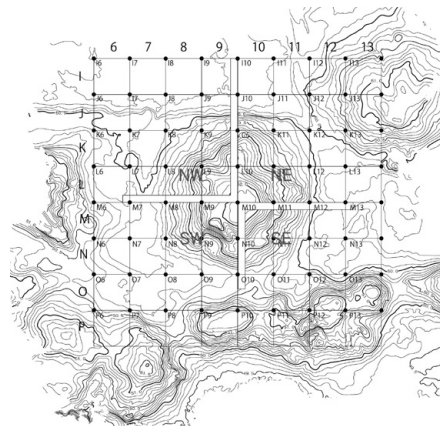


図4 マカバ第1号墳 10m グリッド図

は中央の棺を中心として同心円状もしくは渦巻き状に裾へ広がるよう多数の棺が設置されている。一基の墳丘には三〇〜二〇〇の棺が設けられる。一棺への埋葬は、基本的に単葬であるが、中には一棺に複数体葬られたものもある。小墳丘の重なりによる集団墓とされた大規模墳丘には、ティロス社会の実態や他地域からの移入者の存在を知る答えが存在する
と考える。

四、マカバ古墳群第一号墳の調査

調査地は、バハレーン文化遺産局と協議し、マカバ古墳群となった。マカバ古墳群は、東西に走る幹線ブダイヤ道路の南に取付く南北道路によって東西区に分れるが、西区中央

の最も大きな第一号墳を発掘調査することになった。古墳群全体の三次元計測やUAVの撮影を二〇一七年二月に実施した(図2・3)。

マカバ第一号墳は、直径約六〇m、高さ約二・五mの円墳状の古墳である。二〇一七年度は、墳丘を四分割し、十字の試掘溝を設け(図4)、南東地区(SE)を中心に二〇一七年

一〇月二十五日から一二月九日まで調査し、二カ所の漆喰棺(Fー一二、Fー二七)を完掘した。二〇一八年度は二〇一八年一〇月二三日から一二月三日まで一号墳の南東地区(SE)で四カ所の漆喰棺(Fー一七、Fー三三、Fー五七、Fー六〇)と北東地区(NE)で二カ所の漆喰棺(Fー二八、Fー四七)を発掘調査し

た。二〇一九年度は、二〇一九年一〇月二九日から一二月四日までSE地区を中心に二〇一八年度に検出したFー五六を含めFー六二、Fー六三、Fー六四の四基を完掘した(図5・6)。

A. 二〇一七年度調査

Fー一二・墳丘東側裾の墳丘下約二〇cmにある北東―南西軸の漆喰棺、全長一八五cm、幅五五cm、深さ七〇cm、四壁に黒漆喰、床面に白漆喰を塗布。棺内は盗掘が激しく、人骨は粉々、頭骨、大腿骨、踵骨、指等の細片と施釉陶器片、青銅器片を検出。Fー二七・墳丘西南裾の墳丘下約二〇cmにある北東―南西軸の漆喰棺、全長二一〇cm、幅六〇cm、現状の深さ五〇cm(復元の深さ約一一〇cm)。

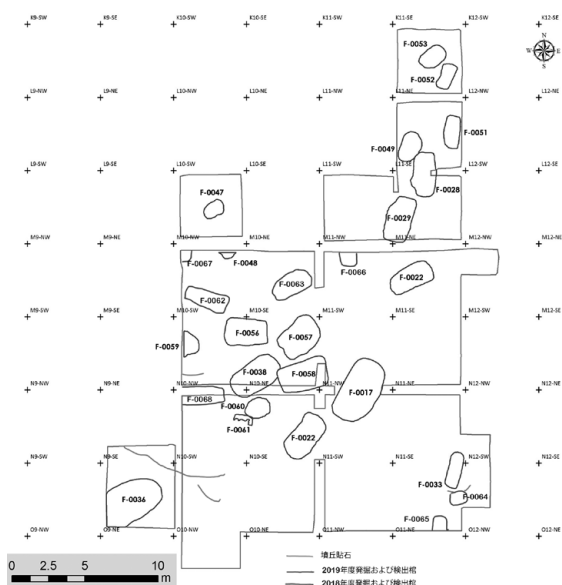


図5 マカバ第1号墳 遺構配置図

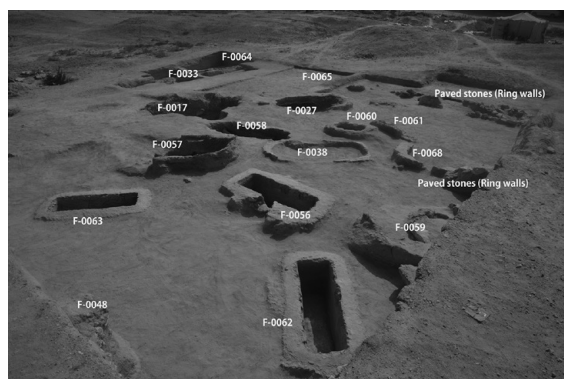


図6 マカバ第1号墳 南東区遺構（北西から）



図8 F-33 人骨出土状況（北から）



図7 F-17 出土ガラス瓶

四壁は黒漆喰、床面は白漆喰を塗布。人骨は床面に頭骨片、四肢長骨片を検出。攪乱土内から骨製ビンの頭部を検出。

B・二〇一八年度調査

SE区

F一七・F一二七の北東の北東—南西軸の漆喰棺、南西小口以外すべて破壊。全長約二〇四cm、幅七三cm、現状の深さ五八cm。四壁は黒漆喰、床面は白漆喰を塗布。この棺には、今まで類例のない仕切りが存在した。仕切りは棺小口から二一cmに位置し、仕切り内床面から完形ガラス瓶二点

が出土（図7）。盗掘が激しく、人骨は肋骨の細片を検出。

F一三三（図8）…SE区南東裾の南北北東—南西軸の漆喰棺、全長一七八cm、幅約五〇cm、深さ四四cm。四壁に黒漆喰、床面に白漆喰を塗布。蓋石は撤去され、棺内は攪乱されていたが、人骨と副葬品は遺存。人骨は四体で、埋葬された三体と流入した一体の小片。埋葬の三体は北北東頭位の大人二体、南南西頭位の子供一体。人骨の遺存状況から三体は同時埋葬。人骨は、交連状況がなく遺体に副葬品を伴うが、どの人骨に何

が伴うかは不明確。二体の大人の腹部から水差形土器が出土。この地域では珍しい赤褐色土器で、AD三世紀頃と若干新しい。棺中央から西壁に瀝青で固められた編物（籠）が数点出土。他の遺物には棺中央北よりで小型青銅製ビン二点、紡錘車一点、円柱状小型青銅製品（編物の留め金具？）一点、青銅製コイン二点が出土。

F一五七・F一五六の東側に接する北東—南西軸の漆喰棺。蓋石は移動。棺は全長一九六cm、幅五七cm、深さ五八cm。四壁は黒漆喰、

床面は白漆喰を塗布。盗掘により副葬品はない。人骨を数片検出。

F一六〇（図9）…F一二七の西側の未盗掘の東西軸の漆喰棺、二枚の蓋石が横架。全長一〇三cm、幅五九cm、深さ六六cm。四壁は黒漆喰、棺底は白漆喰が棺台状に塗布。その上には頭位東の幼児を仰臥伸展で埋葬。幼児は、多くの装身具を装着、首にガラス玉、紅玉髓玉、石英の首飾り、

両腕にガラス玉の手玉、両足首に青銅製足輪、右足首にガラス玉の足輪を着装。胸部から着衣を留めた鉄製ピン、遺体右側から青銅製ピンが出土。

N E 区

F-二八…N E 区東裾部の南北軸の漆喰棺は、全長二一・一 cm、幅五・八 cm、深さ一〇・三 cm で、蓋石はなく、棺両側壁、両小口壁は破壊。棺壁は黒漆喰、床面は白漆喰を塗布。棺内は攪乱、南頭位の仰臥伸展の大人一体の全身骨が出土。頭部は、埋葬後動かされていたが、他の部位は交連状態で埋葬時のままを確認。遺体には青銅製ベル一点、骨製紡錘車二点が共存したが、正確な位置は不明。

F-四七…墳頂中心より北東約三 m、表土下約一〇 cm にある南西―東北軸の全長九・二 cm、幅四・五 cm、深さ五・四 cm の漆喰棺、盗掘を受け、蓋石はない。四壁は黒漆喰を塗布。棺の規模から子供を埋葬。人骨、副葬品はない。

C. 二〇一九年度調査

F-五六…墳頂下約一・五 m にある東西軸の漆喰棺、二枚の大型蓋石を横架、中央やや西に施釉陶器の碗を横倒の状態で検出。碗内には魚骨を含む灰が存在。棺の北側中央側面、

蓋石の合せ目に盗掘坑が存在。棺の漆喰面は全長二八・一 cm、幅二三・二 cm、厚さ八 cm、南側面の中央東よりに漆喰の半円形の張り出しがあり、その中央に径一・七 cm、深さ六 cm の円形の窪みが存在、形状はバルミラの墓室の水鉢のようである。棺は全長二四・〇 cm、幅六・五 cm、深さ九・〇 cm、棺内面は灰黒色の漆喰が塗布。盗掘の棺床面に遺存状況の良い人骨が存在。人骨は動いていたが、頭骨は西側棺小口に、上半身骨が棺中央より西側、下半身骨が東側、骨盤から大腿骨は遺体の埋葬状況を良く残していた。

人骨は、現段階では若年から成人の男性。棺内に副葬品はなく、遺体の埋葬時期は、施釉碗から B C 五〇～A D 五〇頃である (Soren 2007)。

F-六二 (図 10) …F-五六の北西に接する北西―南東軸の漆喰棺。蓋石は三石。南側蓋石の中央側面に盗掘坑が存在。棺身北東隅上に施釉陶器碗が伏せられた状態で出土。碗内には何もなかった。棺は全長二二・二 cm、幅六・八 cm、深さ七・九 cm、棺内は盗掘のため僅かな骨片が遺存。棺の時期は、施釉碗から B C 五〇～A D 五〇頃である (Soren 2007)。

F-六三 (図 11・12) …F-五六の北東にある北東―南西軸の未盗掘の漆



図9 F-60 人骨全景 (北から)

喰棺。蓋石は三石、中央やや東側に施釉陶器碗が伏せられた状態で出土。碗内部に黒灰色の灰が残存。棺は全長二〇・九 cm、幅六・五 cm、深さ九・〇 cm、棺内は、人骨の上に有機質と埃だけが残存。有機質は幅約三 cm の細片を合わせたもので、遺体への被せ物。四壁は黒漆喰を塗布。遺体は全長一七・二 cm、幅四・八 cm、高さ五 cm の白漆喰の棺台の上に仰向けに埋葬。人骨は全身が粉の状態であった。頭骨と棺北東隅の間に二点の重ねられた施釉陶器碗が出土した。

他に遺体に伴う副葬品として、遺体の口の中に小銀貨一枚、左手甲付近に皮袋入り十二枚のコイン (銀貨七枚、銅貨五枚) と鉄製裝飾付銀製

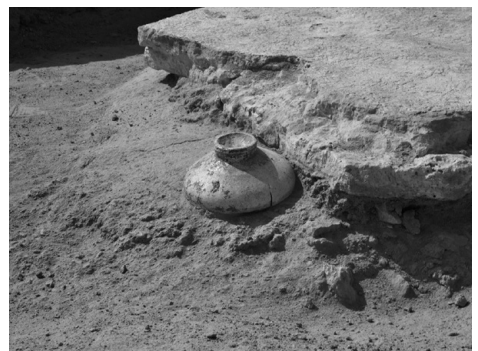


図10 F-62 碗出土状況 (北東から)

指輪が出土。銅貨は、直径一 cm でローマの最小単位の銅貨クアドランスと思われる。ティロス期の墓から硬貨が出土した例は少なく、袋に入られ、遺体に伴ったのは今回が初例である。しかし、全ての硬貨の画像や文字は錆により確認できていない。この漆喰棺の時期は、二カ所から出土した施釉陶器から B C 五〇～A D 五〇頃である (Soren 2007)。

F-六四 (図 13) …南西裾部の F-二三に棺壁が接する。二〇一九年 F-三三の断ち割りによって棺南小口外側に貼り石とその裾部に漆喰棺を検出。F-六四は径約四 m の F-二三の構築後に築造されたと考えられる。棺は盗掘のため蓋石はない。棺

は東西軸の漆喰棺、全長九五cm、幅七〇cm、深さ三六cm。棺内の攪乱土から施釉陶器片が出土。また棺内の東壁を除く各棺壁沿いから真珠貝一〇点が出土。真珠貝は最大が一cm、最小が四cm。この棺は、規模から子供用と考えられる。

五. まとめ

マカバ第一号墳は、漆喰棺を埋葬施設とする直径四m余りの小墳丘墓の集合体である。その小墳丘には外部施設としてF一三三のように貼り石が認められるが、現段階では全ての棺に施されているかは不明である。F一五六からパルミラに類する漆喰製の水鉢状施設を確認したが、その施設が偶然の産物か否か、今後の発掘にかかっている。F一七では棺の内部構造においては従来確認され



図11 F-63人骨出土状況（東から）



図12 F-63コインと指輪出土状況（左手）



図13 F-64真珠貝出土状況（東から）

ていない仕切りを検出し、その仕切り内の完形のガラス瓶二点は、今後、副葬品の配置を考える上で重要である。他に副葬品の特徴的な棺はF一三三である。この棺から出土した赤褐色を呈した水差しは、当地域では珍しい土器であり、時期はAD三世紀前後と考えられる。古墳の出土品としては新しく、この古墳群の築造期間を考える上で重要である。またこの棺からは銅貨二点が出土し、F一六三と同様に二体の大人の口の中に入れられていた。この副葬状態は、ティロスの葬制の一端を考える上で重要である。

他の副葬品は、盗掘のためにほとんどが持ち去られている。F一六四行為としては、棺上への土器の供献がある。天井石が遺存したF一五六、F一六二、F一六三から完形の施釉陶器碗が各一点発見された。碗はひっくり返して置かれたり、碗の正位置を保って置かれたりしていた。碗内には魚骨の混じった灰が入っていたり、何も入っていないかったりと供献状況も異なる。土器の供献は従来の調査で多くの検出例が報告されているように、典型的なティロス期の葬送行為であるが、その仔細は不明であり、今後、多角的な分析が必要である。

は盗掘を受けていたが、子供を葬ったと思われる、棺内から一〇枚の真珠貝が出土した。既往の発掘例から真珠貝と子供がティロス期には密接に関係している。本事例は、その中でも最も多くの貝を納めた墓である。

F一六〇は子供を埋葬した未盗掘墓であり、首飾り・腕輪・足輪など多くの装身具を身につけていた。子供の性別を判別するのは難しいが、パルミラでは、装身具を身につけた子供は女性であることが一般的なことから、F一六〇は女児であると考えられる。

F一五六とF一六三から出土した人骨の歯エナメル質の予備的同位体分析により、同一古墳の異なる二カ所の棺で検出した被葬者が食性と幼少期の居住地域が異なっていたという結果が得られた（西藤・板橋二〇二〇）。今後、人骨の形態的特質や各種同位体分析の結果と比較することによって第一号墳の被葬者の多様性が明らかにできるであろう。

我々の目的とするパルミラ人の痕跡を探るという点においては、まだスタート地点に立った段階であり、さらなる現地での調査を重ねるとともにバハレーン以外の湾岸諸国におけるティロス期の墓との比較を行い、

目的を達成したいと考えている。

本文は、科学研究費助成事業『基盤研究（A）（海外学術調査）「バハレーン・ティロス文化に見るシリア・パルミラの人と文化の影響に関わる総合的研究」（課題番号JP16H02725）（二〇一六年度～二〇二〇年度）』の成果である。調査はバハレーン文化省考古遺産局 Dr.Mohammed Al Khalifa, Dr.Pierre Lombard, Dr.Salman Almahari, Mr.Ali Hassan 氏、他の遺産局職員の多大なる協力の賜物であり、感謝の意を表す。古墳の三次元計測は（株）アコード、古墳群のドローン撮影と画像の三次元化は中部大学渡部展也教授の多大なる協力を得たことに感謝の意を表す。最後に文化省考古遺産局職員へ、我々調査団の良き友人であったKhalil-Alhadad氏が昨年Covid-19の犠牲になったことに哀悼の意を表す。

参考文献

- Gregoratti, Leonardo 2019
 “Indian Ocean trade: the role of Parthia”, Cobb,M(A)ed) The Indian Ocean Trade in Antiquity, 52-72, Routledge.
 Lombard,P. & K.Alsendi 2000
 Bahrain : Two Seas, One

Civilization. Traces of Paradise,

12-17. The Bahrain National Museum,

西藤清秀・板橋悠 二〇二〇「バハレーン・マカバ古墳群の調査」『ヘレニズム

（イスラーム考古学研究会二〇二〇）』
 pp. 八五—一〇三、ヘレニズム（イスラーム考古学研究会）

Salman, Mustafa and S. Andersen

2009 The Tylos Period Burials in

Bahrain Vol.2-The Hamad Town and

Shakhoura Cemeteries,Culture &

National Heritage,Kingdom of

Bahrain.

Seland, E.H. 2014 “Archaeology of

Trade in the Western Indian Ocean,

300BC-AD700” J. of Archaeological

Researches 22,367-402.

Soren Fredslund Andersen 2007 The

Tylos Period Burials in Bahrain

Vol. 1 - The Glass and Pottery

Vessels, Aarhus Universitetsforlag.

二〇一七—二〇一九現地調査参加者（順不同）

西藤清秀、吉村和昭、吉村和久、岡林孝作、岡崎健治、大數由美子、鈴木朋美、齊藤希、岩越陽平、木村結香、上杉彰紀、渡部展也、杉山拓己、間舎裕生、門田哲侍、田邊好、佐々木玉季、玉城妙子、原田怜

中央アジアの農耕牧畜民遺跡 モル・ブラク1・2遺跡の探查報告

辰 巳 祐 樹

一．はじめに

本稿は、二〇二二年夏季に実施したキルギス共和国ナリン州に所在するモル・ブラク1・2遺跡（図1）における遺跡探查の報告である。調査は二〇二二年八月九日から十二日の計四日間にわたっておこなった。

二．モル・ブラク1・2遺跡

モル・ブラク1・2遺跡の所在する現在のキルギス共和国ナリン市は、天山山脈中央部を東西に流れるシルダリヤ川の最上流部であるナリン川に沿って拓かれてきた街である。市街地の南方にはナリン・トー山地が広がり、その山地からはモル・ブラクと呼ばれる沢がナリン川に流れ込む。宿舎のある市街地からこの溪谷沿いに約2km山岳地を歩き、溪谷から東に二〇〇mほど急斜面を登った標高二四〇〇mほどのところに、モル・ブラク1・2遺跡の所在する小盆地状の平坦地が眼前に広がる（図2）。現在、遺跡周辺は季節的な放牧地として利用され、本期間中も、ヒツジ・ヤギ・ウマがのびのびと草を

食んでいる様子を尻目に調査をおこなった。

モル・ブラク各遺跡の考古学調査は二〇一六年から実施され、モル・ブラク1遺跡の発掘調査では、紀元前二〇〇〇年頃から紀元後三五〇年頃までの、中期青銅器時代、後期青銅器（初期鉄器時代、サカ時代、烏孫時代までの四時期の堆積層が確認されている。第二期の後期青銅器時代（初期鉄器時代頃には家畜化されたヤギ、ヒツジ、ウシ、ウマ、栽培化されたコムギとオオムギが出土し、第三期のサカ時代には遺構や遺跡利用の証拠が顕在化し、遺跡南方では墓域も形成されるようになる。これらを含むさまざまな考古学的証拠から、モル・ブラク遺跡は季節的なキャンプ地としての利用を経たのちに、通年の居住地として利用された可能性が考えられている。しかしながら、モル・ブラク各遺跡における調査は始まったばかりであり、考古学的資料は限られている。遺跡の性格の通時的な変遷が解明されつつある一方で、遺跡の全体像は



図1 モル・ブラック遺跡近景（西から）

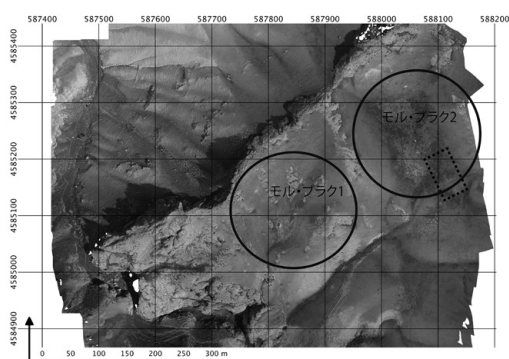


図2 遺跡周辺のオルソ画像
(早川裕式氏提供、破線部は図3の範囲)

明らかになっておらず、遺跡の平面規模も定かではない。また、モル・ブラック2遺跡の東端と想定される小盆地の尾根の切れ目周辺の地表面には石組遺構の一部と考えられる石材が点在しており、現地表面から確認できる形態から、家屋の基礎・水利施設・墳丘などの可能性が示唆されているが、この実態も不明である。したがって、今後の遺跡の面的調査・研究により遺跡の性格をより正確に解明していく必要がある。その一環として、遺跡の遺構分布および一部地表面に露出する石組の遺構プランの把握を目的に、今回の地中探査を実施した。

三、探査方法

調査には、非破壊探査手法である地中レーダー探査を用いた。地中レーダー探査は、異なる物質間の境界面で生じる反射波を測定することにより、地中の異物の存在を推定する方法である。土坑やピットなどの推定は困難だが、通年利用される建物などの建材に用いられる石材と、周囲の土壌などの堆積物との境界面で、明確な反射振幅の差を測定できると考えられるため、本手法を選択した。測線間隔は、遺構分布を調査する目的の箇所では一〇〇cm、遺構プランを推定する目的の箇所では五〇cmと

した。測定範囲はモル・ブラック1遺跡で一〇〇〇m、モル・ブラック2遺跡で五〇〇〇m、合計六〇〇〇mとなった。探査機器にはSensors & Software社製のLMX200 Enhanced（中心周波数250MHz）、編集・解析には同社EKKO_Projectをそれぞれ使用した。

四、石組遺構の探査結果

本稿では、モル・ブラック2遺跡の石材点在地の探査結果として、その探査範囲における地表下深度二〇～六〇cmおよび六〇～一〇〇cmの疑似平面図（タイムスライス）を図3に、遺構である可能性のある反射を示す主な測線下の疑似断面を図4に示す。両図では電波の反射振幅が大きい箇所は黒色、小さい箇所は白色で表している。

まず、Aとして示した反射が、この地点で主目的としていた地表面に散見される石組にあたる。この石組は、内部は、二列構造のプランを有しているようで、少なくとも内部に石材の反射は認められない。基本的には短軸三m（測線②）、長軸一〇m程度で石列は収束するようで（測線③・④）、長方形あるいは長楕円形のプランを有している。今回の探査区

内ではAを含め合計三基の同様の石組遺構が連なり探査区平面の長軸方向に弧を描いて延びるプランがうかがえる。また、この遺構に隣接して、五m×三m程度の平面規模を有する遺構と推定される反射も認められる（B・測線④）。位置的にはAの石組遺構群と関連する可能性はあるが、堅固に締まった盛土状の構造物であると解釈できるため、少なくともAとは異なる遺構の構造や性質の遺構と考えられる。

この一連の遺構以外にも、石組遺構と考えられる反射が探査区内で一基存在するようである（C・測線⑤）。これは、平面形が五m四方の方形あるいは円形の石組遺構であると推定できる。Aと同様に内部からは明確な石材の反射は認められない。また、Aの石組遺構の反射では確認できないが、Cには石組の上部に盛土が施されている可能性もうかがえる。ただし、Aの石材の一部が地表面で散見されたことから、Aの上部は破壊されているだけで、本来盛土を有していた可能性は否めない。なお、この盛土状の反射は石材の直上のみで認められ、石材で囲まれた石組内部には認められない。

また、明確な石材の利用が認めら

れない七×三m四方の盛土で平坦面を形成した遺構の存在もうかがえる(D・測線①)。現地表面では、この遺構の北東に隣接して直径四〇cm大の多数の石材が円弧状に配列されている(E)。現代のキャンプ地設営のための転用である可能性もあるが、これらが一連の遺構の可能性もある。

以上のように、石材が散見された箇所では、石組遺構には円弧状に配列された長方形あるいは長楕円形の三基の石組遺構と、これらとプランの異なる方形あるいは円形の石組遺構、またその他の盛土状遺構が存在することが推定された。

長楕円形の石組遺構については、そのプランや配置から家屋の基礎としては想定しがたく、盆地の切れ目となる尾根の延長上に位置することから、水利施設あるいは周壁などの、モル・ブラク2遺跡とそれ以东を区画するような機能を有していたことが想定される。また、円形あるいは方形のプランを有する石組遺構は、既往調査で明らかにされたサカ時代の環状列石墓と類似し、こちらも遺構平面中央部の盛土が欠落していることから、盗掘を受けたものと考えられる。

五 おわりに

モル・ブラク1・2遺跡の調査は開始されたばかりで、かつ周辺の同時期の発掘調査事例がない。今回の探査で推定されたプランを有する遺構を比定しうる類例がほとんど存在しないため、本調査のみで遺構、遺跡の性格を明らかにすることはできない。しかしながら、同遺跡の発掘調査や周辺調査と本探査結果を交互にフィードバックをさせることが、今後の研究を大きく進展させる一助となると考えている。

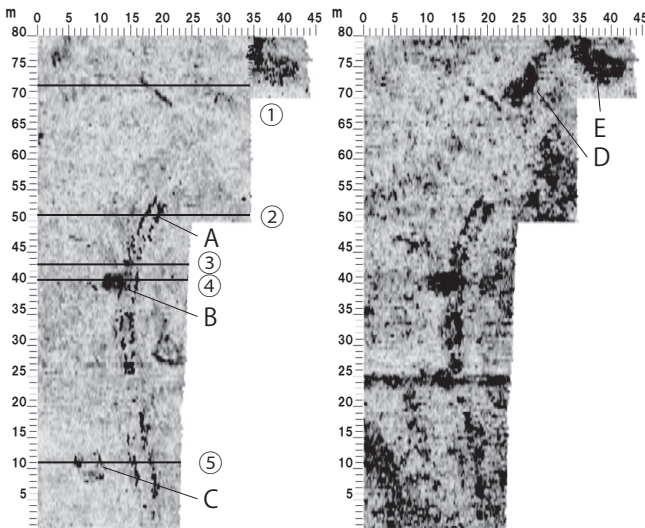


図3 探査区内疑似平面図
(左：地表下20-60cm、右：地表下60-100cm)

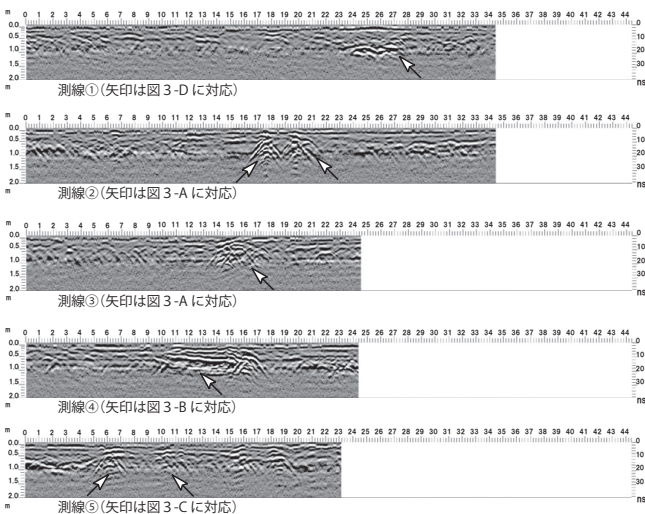


図4 測線下疑似断面図(それぞれの測線位置は図3参照)

なお、本調査は日本学術振興会科学研究費助成事業・基礎研究(A)(一般(研究代表者：久米正吾、課題番号JP21H04357)、学術変革領域研究(A)・計画研究A01(研究代表者：中村慎一、課題番号JP20H05816)、同基金・若手研究(研究代表者：辰巳祐樹、課題番号JP21K13474)の助成を受けて実施した。また、不安定な世界情勢のなかでの調査の遂行から本稿の執筆に至るまで、久米正吾氏(金沢大学)、アイダ・アブディカノワ

氏(中央アジア・アメリカ大学)、新井才二氏(東京大学)、早川裕弐氏(北海道大学)から多大なご支援、ご協力をいただいた。この場を借り、感謝を申し上げたい。

参考文献

久米正吾ほか 二〇二一「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交渉の始まりを探る」『第二八回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会